

審査の結果の要旨

氏名 田中 創

本論文は、4世紀後半の東地中海世界で展開された、ローマ帝国地方行政における州総督と諸都市との関係を、ソフィストと司教の役割に注目して解明しようと試みる。皇帝と帝国政府による一元的中央集権政治として当時の帝国行政を理解する通説に疑問を呈し、後期ローマ帝国社会における地方政治の展開について新たな視点から考察している。

第1章から第4章までは、州総督と州民との政治的関係を検討する。第1章では、歓呼賛同(acclamatio)という政治習慣を取り上げ、劇場に臨席した都市の諸集団が、地元社会から総督に一定の政治的圧力をおよぼしたことが確認される。第2章では、州総督と都市民とのやりとりの中で、ソフィスト(公的弁論教師)が在地有力者の代弁者としての役割を負っていたことが示される。第3章は、ソフィストの一人リバニオスの書簡集を分析することによって、彼が、中央政府と地方との仲介者として行動していたことを明らかにする。第4章は、カッパドキアの司教であるバシレイオスとグレゴリオスを取り上げ、ソフィストと似た仲介者としての役割を、やや限定的ながら看取することができるとする。

第5章、第6章では、都市アンティオキアを舞台として、ソフィストと司教が当時の地方政治においてそれぞれどのように地方民に利用されていたかを検討する。第5章では、修道士による神殿破壊という事件をめぐり、司教が仲裁・和解手続きに関する依頼を求められたのに対し、ソフィストが州総督をも巻き込んだ法廷係争において手腕を期待されたことが明るみに出される。第6章では、387年に起きたアンティオキア暴動後の地方と帝国政府の関係修復において、リバニオスが果たした中心的役割と、キリスト教会側のごく限定的役割とが確認される。最後に本論文は、ソフィストを介して地方民が活発に帝国政府と交渉していたことを重視し、帝国政府による一方的な中央集権支配という通説的構図に修正を迫っている。

本論文は、ソフィストと司教の書簡という史料に新たな光を当て、それを独自の視点から分析することによって、積極的・自律的に行動する地方の諸都市と中央政府との関係性を明るみに出し、通説に重大な変更を迫ることに成功している。膨大な史料と研究史を博捜しながら、首尾一貫した議論を構築したことは、筆者の構想力の強靱さを示すものとして高く評価される。また伝承上問題の多い弁論家の著作を綿密に史料批判しながら手堅い実証研究の俎上にのせる筆者の分析の手法は信頼できる。一部未熟な表現や生硬な史料訳文など細かな点で若干不満を感じさせる点もあるが、全体の論旨は明快で説得力がある。最新の研究動向をふまえた上で、の新知見が数多く提示され、これまで研究の少なかった4世紀ローマ帝国行政史にもたらす学術的貢献は大きく、本論文は博士論文としての水準に十分達しているものと認められる。

よって審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位にふさわしいとの結論に達した。